



勉学に勤しみ、有意義な 学生時代を送ろう

学会長 北條勇作

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。心よりお慶び申し上げます。これから展開する希望に満ちた学生時代に対しまして心を弾ませていることと思います。勉学に勤しみ、素晴らしい人格を形成し、また一生交流できる親しい友達をたくさん作り、どうか悔いのない充実した有意義な生活を是非送って下さい。

自明のごとく大学の使命は教育と研究にあり、経済学会はそれらの（なかでも研究の）一翼を担い重要な役割を果たしています。本学会では、機関誌『高崎経済大学論集』の発刊（年4回）、学術講演会の開催（年4回）、研究会の開催（年2回）、『Intro—学びへのいざない—』の発行（年1回）〔新入生が主たる対象です〕、ゼミ卒業論文集刊行費補助などの事業を展開しています。

ここで私は、皆さんのこれからの学習・研究の参考に少しでもなればと思い、経済学・経営学についてごく簡単に論述しておきます。

経済学 (economics) — アダム・スミス (Adam Smith) によって1776年体系づけられました—とは、人間の経済活動・行動、またそれらによって発生するところの経済現象を研究対象とするものであり、財（財貨と用役〈サービス〉から成る）の生産・分配・交換・消費などについて研究し、そこに存在する法則性（経済理論）を導出する、また得られた理論の応用を目論む学問であります。経済学は、近代経済学とマルクス経済学の二大支柱に大きく分類でき、また近代経済学は、ミクロ経済学（価格分析）とマクロ経済学（所得分析）の両分野が存在します。

経営学 (business administration, business management) とは、経営—資本家、経営者、労働者などが同一の経営体を形成し、その組織が機能しているの、経営は組織体として、また機能面として眺めることが出来ます。なお伝統的理論では、通常、意思決定を遂行する行動主体を資本家あるいはその代行者である経営者に単純に限定化しますが、最近の新しい理論においては、経営体を構成する総てのものを行動決定主体と見なし、各主体の意思決定の相互依存作用（関係）による経営システムを考察して行きます—の構成と行動の諸原理を把握・研究する学問であり、その論究の方法論の特徴はもちろん実践理論（この考え方はよく言われるように、論理的には理論と政策を一体としたものです）にあると言えます。

柔軟な思考のもと論理的展開ができ無限の可能性を有しているこの時期に、自身の向上を望み、労をおしまず頑張って勉学に励み、感動を覚えながら両学問のいろいろな分野の妙味を心ゆくまで味わった学生は、そのことが将来に亘って様々な意味において大変な糧になるでしょう。

YUSAKU HOJO

経済学部教授。

1947年生まれ。高崎経済大学経済学部卒業、早稲田大学大学院経済学研究科理論経済学・経済史専攻修士課程修了、青山学院大学大学院経済学研究科経済政策専攻博士課程単位取得。高崎経済大学講師・助教授を経て現在同大学教授。専攻は経済地理学、経済立地論。著書には『シュムペーター経済学の研究』、『経済地理学』、『経済学の一方向』などがあり、また論文その他も多数存在する。